

---

# 幻獣観察物語～吸血鬼～

Douke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻獣観察物語〜吸血鬼〜

### 【Nコード】

N8952Y

### 【作者名】

Douke

### 【あらすじ】

一人、森の中を歩く青年がいた。森の中には湖があり、小さな少女の姿があった……。

この作品は、『吸血鬼の噂話』を長編にリメイクした作品です。

## パート1

一人、森の中を歩く青年がいた。

年齢は若く、おおよそ二十代前半であろう。けれどその類には、青年には似合わない傷跡が深く刻まれていた。

格好はこれまた似合わないコートを着ており、頭にはベレー帽を被っていた。

そしてその手には、旅行用のトランクがあった。

青年の歩調はどこか焦っているかのように早足だった。

まだ日は高く、近くに獣のうなり声は聞こえないので、追われているというわけではない。

ただただ、森の中を早足で歩いていた。

その顔には、期待と興奮。

しばらく歩いていると、綺麗な湖があり、その近くに一人の少女が湖の水を手ですくって飲んでいた。

しかしその格好は少しおかしく、ネグリジエを着ていて、その上に黒いマントらしきものを身にまとわせていた。

「見つけた……！」

青年は少女の姿を見た途端、少女に向かって走り出した。

足音に気付いて、少女は視線を湖から青年へとゆっくり移した。静かに立ち上がると、警戒しながら青年に尋ねる。

「……お主、何者じゃ？」

その少女に似合わない口調や雰囲気は、まるでどこか高貴の貴族のようだった。

少女の問いに答えず、青年は少女の元まで走ると、その場で荒れた息を整える。

ゆっくりと深呼吸をし、少女に向き合った。

「僕はマルク・ヴァンプール。ただの旅人さ」

「……なるほど。旅人であったか。しかしこの先にはただ森が広が

っており、森を抜ければただ山があるのみじゃ。戻って別の所を旅するがよいぞ」

「いや、僕の旅にはきちんとした目的があつてね。今ここにいる君に聞きたい事があるんだ」

「愚かな人間に答える口は持たぬが、特別に答えてやろう」

愚かな人間と聞いた瞬間、青年は確信した。

けれどそれを確認するかのように、青年は少女に尋ねた。

「君は……魔女かい？」

## パート2

この世の中、人にあらずものは忌み嫌われていた。それらは全て『化け物』などの一言にまとめられ、住処を奪い、殺していた。

たとえそれが、人間にとって友好的なものであっても　だ。しかし、今でも人間に見つからないようにひっそりと生き続けている。

そして化け物の基準も大きく変わっていた。

人にあらずものだけではなく、人間という道から外れた人間も忌み嫌われるようになってしまった。

例えば魔女。

人に害するものを作り、時に妖しげな言葉を使う。

そう思われるだけで、処刑された人は数多くいる。

マルクはそういう『化け物』といったものを探し、旅をしている。そして先日泊まった村にて、近くの森に魔女が住んでいるという噂を聞き、その噂が事実かどうかを確かめるため、向かったのだが。

「お主は馬鹿か？」

マルクの期待は、少女のその一言であっさりと打ち砕かれた。

「今どき魔女なぞ馬鹿馬鹿しい。お主は子供か？」

「へ……？　つ、つまり君は魔女じゃないの！？」

「そう言っておるじゃろうが」

そんな……、と言いながら手に持っていた旅行用のトランクを地面に落とした。

けれどすぐにマルクは立ち直った。

「……まあ、噂ってのは大体がデマだしね。こういう事もあるよな。ちなみにこの辺りに君の他に人はいる？」

「この辺りは我を恐れてか、人どころか獣もうつらんぞ」

「だよな……」

ふと、そこで少女の言っている事が少しおかしい事に気付く。

「……君を恐れて？ 魔女じゃないんだから、どこからどう見てもただの少女にしか見えないけど……」

すると少女は無い胸を張り、急に威張りだした。

「ふふん。我が誰だか知りたいか？」

「そりゃ、こんな所に君みたいな少女が、そんな変な格好をしているってのは疑問に思うけど」

「へ、変じゃと！？ お主の方がよっぽど変な格好じゃ！ 特にそのベレー帽！」

「なっ！？ 確かに格好が変なのは自覚してるけど、ベレー帽を悪く言うな！ それを言うなら君のそのマントだって似合っていないよ！」

「き、貴様……！」

すると、肩を震わせながら少女の体が宙に浮き始めた。

「へ……？」

「ふ、ふふ……。我を怒らせたな？ この我を怒らせたら、どうなるかその身に刻ませてやる！」

そして爪を立て、その小さな体をマルクに向かって飛翔した！

「我が名はミネル・スカーレット！ そして 吸血鬼じゃ！」

あと数センチで、マルクにその爪が届くところで……。

「ぎゃっ！」

丁度、木々の隙間から差し込む日差しが少女の顔に当たり、爪ではなくそのままマルクに体当たりするような形になってしまった。

それをマルクはもろに喰らい、二人で抱き合うような感じに巨樹に当たるまで転がった。

「ふ、ふにゅ……」

「魔女じゃなくて、吸血鬼だったのか……」

止まるさいに、思いつき頭をぶつけたマルクだったが、そんな

事を気にも留めないで気絶しているミネルを見ていた。

このままじつくりと観察したい。だけどそれだとただの観察だ。僕がしなくちゃいけないのは、生態観察なんだから。

そう思いながら、マルクはミネルをおぶりトランクを左手に持つて、森の奥に進んだ。

## マルク・ヴァンプールの第十三回目のレポート

今回も、なんとか幻獣の一種である存在に出会える事が出来た。出会った幻獣は、なんとあの人間の血を吸うことで有名な吸血鬼だ。

出会いがしらに空を飛んで襲われるという、とても不思議かつ貴重な体験をしたが、はたして本当に吸血鬼は人間の血を吸うのか？そしてどれほどの脅威があるのか？

前回同様に、その事について調べていきたいと思う。

さて、初めての方もいると思うので、まず幻獣というのがなんなのか。まずはそこから説明していこう。

幻獣とは文字通り、幻とされる獣。

そのまま読めばそうなるが、この本の中では少し意味が異なっている事に気をつけて欲しい。

僕の中の幻獣とは、人間から嫌われ、恐怖を与えさせ、それにより人間の手によって住処を奪われ殺されてしまった存在の事を指す。なるほど。こう書いてしまうと、ただただ幻獣というのは『いてはいけない存在』と思ってしまっただろう。

だがそれは違つと、僕は考える。

確かに中には凶暴で、恐ろしい存在もいるだろう。だけれど中には人間と友好的な存在もいるだろう。

もちろんこれは僕の勝手な思考だ。ほとんどの人がそうは思えないだろう。

しかし、僕はこれまでそういった存在と関わってきた。もし凶暴な存在がいなければ、いままで僕は本を出す事が出来なかったであらう。

信じるか信じないかは、もちろん自由だ。でもこれだけは分かって欲しい。



たとえ忌み嫌われる存在だとしても、きちんと手を取り合えば共に歩む事が出来るのだと。

それでは、今回出会った吸血鬼の特徴について説明しておこう。ちなみに今その吸血鬼は、日ざしに当たってしまったからか気絶してしまい、偶然見つけた小屋のベットのの上に寝かせている。

外見は八〜十歳くらいの少女。ロングヘアーの金髪でとても可愛らしいブローチを着けている。中身を見てみたいところだが、勝手に見てしまうのは人としていけない行為なので、我慢する事になっている。格好は白いネグリジェの上に何故か黒いマントを羽織っていた。

襲い掛かってきた時はどうしようかと思ったが、こうして見ると、ただの幼い少女が眠っているだけだ。

だが話し方がかなり少女にしては独特で、まるで貴族の令嬢みたいな話し方だった。もしかすると、この吸血鬼は前は人間で、他の吸血鬼に噛まれて自身も吸血鬼になったかもしれない。

ともあれこれは仮定なので、真実は分からないがこれからこの吸血鬼について調べていきたいと思う。

### パート3

目を覚ましたミネルは、いまいる場所がどこだか咄嗟には分からなかった。

「こ、ここは……」

次第にここが自分の暮らしている小屋だと分かった。

けれど、いつの間に戻ってきたのだろうか？ 確か湖の水を飲んでいたら、変な人間がやってきて……。

そこまでは覚えているが、どうしてもその先が思い出せない。

頭だけを動かすと、そこにはテーブルでうたた寝しているマルクの姿があった。

自分がベッドにいて人間がここにいるという事は、また日光に当たって気絶してしまったのだろうか。だとしたら、記憶が無いのも納得できる。

体を起こしてマルクの方に近づくと、どうやらマルクは、何かを紙に書いている最中に寝てしまったようだった。

ミネルが何を書いていたか見るために、紙を取ろうとすると……。

「……ん、あれ、起きたんだ」

ミネルが近づいてきた気配に気付いたのか、いきなりマルクが目を覚ました。

「お、お主……何故ここにおる！？」

驚いたミネルは、どうしてマルクが小屋にいるのかを、少し戸惑いながら尋ねた。

「ふわ……ああいや、ごめん。いきなり君が気絶したから、とりあえず横になりそうなところを探していたら、この小屋を運よく見つけてさ。近くの村に戻ろうかと思ったんだけど、吸血鬼の君を連れて行けないだろ」

「ここは我の家じゃ！ お主はさっさと出て行け！」

「君の？ ああ、だからこんなに整ってるのか」

マルクはミネルの言葉を無視して、小屋の中を見渡した。

小屋の中には本棚や暖炉、他にも服をしまうタンスなどといった、人間の生活に最低限必要な家具があった。本が散らかっているなどという事は無く、埃はひとつも落ちていない。

ただ、ひとつ。マルクは気になることがあった。

「……でもなんで、こんなところに木こりの斧が？」

これだけ整った環境に、なぜか入り口の横に斧がぽつんと置かれていた。

ミネルはマルクの質問に答える。

「ふん。ここは元々木こりの家みたいでの。長らく誰も使用しておらんかったから、我が有効活用させてもらっておるだけじゃ」

「なるほど。だから吸血鬼だけじゃなく、普通の人でも暮らしている環境なんだな」

「……お主、いったいどういふつもりなのじゃ」

マルクは質問の意味が分からず、問い返した。

「どういふつもりって？」

「私の正体を知ったにも関わらず、何故逃げぬ？ 何故怯えぬ？

何故殺そうとしない？」

「おいおい殺すだなんて。吸血鬼なんて貴重な存在、殺すなんてもつたいないだろ」

マルクとしては真面目に答えつつもりだが、ミネルにとっては逆に不審感が強まるだけだった。

そしてさらに、マルクは言った。

「そんなことより、僕もしばらくここに住み着いていいかな？」

「はあ……？ お主、なにを訳の分からんことを言っておる？」

「だって、すでに全滅したはずの吸血鬼が目の前にいるんだ。こんな貴重な存在を観察しないわけにはいかないだろ！」

「観察……？ お主はただの旅人であろう？ 何故我を殺さずに観察するのだ？」

「本にして売り出す！」

## パート4

マルクの目はまるで子供のように輝いていて、どこか固い決意が秘められていた。

今の世の中、本を書くという職業は稀であつた。

そもそも本を読むこと自体が少ないのだ。それゆえに本を出したとしても、売れず、すぐに別の職業をする事が目に見えている。

だが、やはり売れる人はいる。当たれば一躍有名になり、大金を手に入れる事が出来る、まさに賭博のようなものだ。

「そしていつかは、全世界に僕の本を広めて」

「なるほど。つまりお主はこう言いたいのだな？」

マルクの話を通り、冷たい口調でミネルは言った。

「自分の利益の為に、我という存在を観察すると」

「それはちよつと違うかな。確かに僕は旅をする為に利益は欲しいさ。でも僕の場合は……」

「たとえ違つたとしても、我にとっては自分という存在を勝手に売られる事実は変わらぬ！」

ミネルは、自分でも知らない内に怒鳴っていた。そしてそれは、止まらずにどんどんあふれ出していく。

「分かるか人間、自分の存在が他人に売られるのを！勝手に買われていくのを！分からぬだろうな。何故ならお主は人間、我は吸血鬼だからじゃ！存在自体が違う！なにもかも！だから我は人間と関わるのをやめたのじゃ！それなのに、そんな我をお主が観察するじゃと？ふざけるのも大概にしろ！我の……我の気持ちも知らずに！」

そして小屋の出口である扉を指差し、

「ここから出て行け！さもなければ……殺すぞ！」

あまりにもミネルの剣幕に押され、マルクは大人しく従つた。

「わ、分かつた。この小屋からは出て行くよ」

急いでテーブルの上に広げていた紙やペンをトランクにしまい込み、逃げるかのようにマルクは小屋を出て行った。

出て行ったのを確認したミネルは、ふらふらとベットに倒れこんだ。

言ってしまった。

決して口にはしないと、決めていたのに。

あんな簡単に『殺す』なんて、言ってしまった。

「……母上、父上」

今は亡き存在を、ミネルは泣きながら呟いた。

「……しくったな。こうなるとは思わなかった」

小屋を出て行ったマルクは、その近くにある樹木を背もたれにして、座り込んでいた。

「でも、諦めるつもりは無いからな」

まるで自分に言いつけるように。あるいは怒らせてしまった吸血鬼に向けて。

「これは僕じゃなくて、君みたいな存在を救うために、やっていることなんだから。それが達成されるまで、僕は諦めないし、絶対にくじけたりしない。だってこれは……」

僕の罪の償いでもあるんだから。

最後の一言を、マルクは口にはせず心の中で呟く。

その後マルクは野宿をするために、道具を広げ小枝を集め始めた。

## パート5

その夜。

マルクは焚き火のわずかな明かりで、本を読んでいる時だった。少し離れたところから、微かに音が聞こえた。

「……………」

まさか狼が？ そう思ったが、ミネルは自分の事を恐れて人どころか獣すら近づかないと言っていたのを思い出し、マルクはすぐに別の可能性を考えた。

とりあえず荷物をまとめ、焚き火を消さないまま隠れる事にした。樹木の陰に隠れていると、音は小さいが徐々に近づいてくるのがわかる。音とその間隔からして、どうやら人のようだ。しかも一人ではなく、複数。

森の中なので顔はよく見えないが、焚き火のおかげでシルエットだけは見ることが出来た。

数は三人。どちらも体は大きい巨体で、その手には農作業で使われる鍬や斧が。おそらく近くの村にいる男達だろう。

（やっぱり、目的はあの子か）

マルクの推測では、魔女と噂されているあの子を捕まえに来たと考えている。

ただでさえ忌み嫌われている存在だ。討伐、あるいは捕獲しようとするのは、もはや当たり前前の行動だ。

「……………」でも、そうされると困るんだよな」

マルクはトランクから果物ナイフを取り出した。

男達は小屋の中に入ると、ミネルはベットの上で寝ているところだった。それを確認すると、急いで手と足を縄で縛り、喋れないように口も縄で縛ろうとした。その時、ミネルが目を覚ました。

「な、なんじゃお主ら！？」

「おい、目を覚ましやがった！」

「急いで口を縛れ！」

必死に抵抗しようとしたが、さすがに男達の腕力には歯が立たず、すぐに拘束されてしまった。

「むー！ むー！」

「へ、へへ……。安心しな、魔女。俺たちはお前を殺しに来たんじやない」

「悪いが、俺たちの生活の為になつてもらおう」

それを聞いた瞬間、ミネルは全てを悟った。

自分はどこかの貴族が王に売られるのだと。

いままでは、誰かが小屋に入ろうとする前に気付き、木こりの斧を使って追い出してきた。が、疲れていたせいで反応が遅れてしまった。

このまま売られてしまつても、いずれ殺されてしまうだけ。

ミネルにとつて、それは一番いやな事だった。

「むー！」

「こいつ、おとなしくしやがれ！」

たとえ縛られたとしても、ミネルは体を無理矢理に動かして、なんとかして逃げようとした。

しかし、所詮は少女の体。あっさりと抱えあげられてしまう。

「よし、このまま……」

「村に戻つて売ろう、とか考えないでくれよ」

小屋から出ようとした男達の前に立ちふさがったのは、マルクだった。

男達は突然の乱入者に驚いたが、一番驚いたのはミネルだった。

「むー！？ （な、何故お主がここに！？）」

「ゴメン、約束を破つて。でもこの状況じゃ、そんな事言ってる暇じゃないだろ？」

「だ、誰だお前！ こいつは俺たちの獲物だ！」

「おいおい。僕は別に奪いに来たとか、そういうのじゃないさ。で

も、その子を攫うのは勘弁して欲しいんだ」

体つきからして、人数からして圧倒的に男達が勝っているのに対し、マルクは至って冷静だった。

「だってその子は、僕の大事な友人になる予定なんだから」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8952y/>

---

幻獣観察物語～吸血鬼～

2011年12月1日20時53分発行